

山田業広 医案①

余が姻家 大沼九左衛門 年五十余。寒熱、舌上微白胎、熱飲を好み、格別の大熱なく、日数僅かに兩三日を過ぎるに 大に委頓し、登廁人を仰ぐ。脈沈微なり。初起なれども発表の候なし。附子ならんかと思へども下利せず。小便甚赤し。因て本方（当帰四逆湯）を与るに、大に効ありて 四五日にして熱解し、食氣出づ。最早程なく 床揚をせんなど云ふ頃より、夜三四更に目寤れば、必熱湯を飲む。凡大薬缶に一盃位なり。昼は少しも渴せず。毎夜 斯の如し。陰分の不足ならんと思ひて、八味丸料に転じたれば速に愈たり。